

# 台湾学園映画が回顧する1990年代と日本大衆文化

著者	赤松 美和子
雑誌名	大妻比較文化 : 大妻女子大学比較文化学部紀要
巻	20
ページ	3-21
発行年	2019-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006678/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006678/</a>

# 台湾学園映画が回顧する1990年代と日本大衆文化

赤 松 美和子

キーワード：台湾映画、日本表象、日本大衆文化、ジェンダー、学園映画

## 1. はじめに—台湾映画の素材に選ばれてきた1990年代

本稿では、台湾における1990年代の高校を舞台とする学園映画を分析対象としている。まず、以下の台湾における台湾映画のチケット売上ランキングを参照し、どの時代を舞台とした台湾映画が多くの人に知られてきたのか確認する。

台湾映画チケット売上ランキング（台湾国内、2017年まで）<sup>1</sup>

1. 魏徳聖『海角七号 君想う、国境の南』（2008） 5.3 億元
2. 魏徳聖『セデック・バレ 太陽旗』（2011） 4.72 億元
3. 邱瓌寛『大尾鱸鰻』（2013） 4.3 億元
4. 九把刀『あの頃、君を追いかけた』（2011） 4.1 億元  
陳玉珊『私の少女時代』（2015） 4.1 億元
6. 陳玉勳『祝宴シェフ』（2013） 3.2 億元
7. 魏徳聖『セデック・バレ 虹の橋』（2011） 3.18 億元
8. 馮凱『陣頭』（2012） 3.17 億元
9. 馬志翔『KANO 1931 海の向こうの甲子園』（2014） 3.1 億元
10. 鈕承澤『モンガに散る』（2010） 2.8 億元

これら10本の映画はいずれも2008年以降の公開作品だ。これらの作品が描いた時代に注目すると、全編を通して同時代を描いた作品は、『陣頭』（第8位）のみであり、過去の特定の時代を描いたものや、同時代から語り始め特定の時代にタイムトラベルするなど過去を舞台とする作品が多い。中でも素材として最も多く選ばれている時代は、日本統治時代である。例えば、日本の植民地統治と引き揚げを日台の悲恋の物語として同時代から回顧した『海角七号』（第1位）、1930年に起こった抗日暴動・霧社事件を活劇化した『セデック・バレ 太陽旗』（第2位）『セデック・バレ 虹の橋』（第7位）、および1931年の嘉義農林学校野球部の甲子園での準優勝を青春ドラマ化した『KANO』（第9位）など4本が全編

あるいは一部で日本統治時代を舞台としている<sup>2</sup>。続いて、『大尾鱸鰻』（第3位）、『あの頃、君を追いかけた』（第4位）、『私の少女時代』（第4位）のように1990年代を舞台とした作品が多い。その内、2010年代に公開された『あの頃、君を追いかけた』、『私の少女時代』はいずれも現代から始まり1990年代の高校時代を回顧する学園映画である。これらの映画には、1990年代の台湾が再現されており、断片として当時の台湾で受け入れられていた日本大衆文化も現れる。

本稿は、1990年代を描いた台湾学園映画を分析対象として、日本大衆文化がどのように描かれ、どのように機能しているのか、その手法と意義を分析することを目的としている。

## 2. 台湾の学園映画の系譜と日本表象

### (1) ニューシネマにおける青春学園映画

本節では、先行研究を確認しながらこれまでの台湾学園映画について概観する。

台湾の学園映画は2000年代に初めて撮られたわけではもちろんない。例えば、1980年代の台湾ニューシネマにおいても、陳坤監督の『少年』（1983）や侯孝賢監督の『童年往事』（1985）エドワード・ヤン監督『牯嶺街少年事件』（1991）などがある。

こうしたニューシネマにおける学園映画について、趙庭輝は「これらの映画にはリアリズムの特徴が多分に見受けられる。青少年の目を通して台湾社会と文化の変遷を見つめ描いている。さらに物語は大筋において基本的に男の子を主要人物として、男の子と彼らのホモソーシャルな関係を注意深く描いており、女の子の役割は「引き立て役」に据え置かれている。よって、女の子と彼女たちとの関係、或いは、男の子と女の子が性指向やセクシャリティーといった困難に直面した際の焦りや葛藤を追求することは難しい<sup>3</sup>と指摘している。こうしたリアリズムで撮られた学園映画に描かれた時代は1960年代が多く、1947年生まれの子侯孝賢監督やエドワード・ヤン監督たちの高校時代とも重なる。

### (2) 1990年代を描く台湾学園映画と日本表象

本節では、2000年代以降に公開された1990年代を舞台とする台湾学園映画4作品『藍色夏恋』（2002）、『九月に降る風』（2008）、『あの時、君を追いかけた』（2011）、『私の少女時代』（2015）を公開年順に取り上げ、作品の概要を確認した上で、日本に関係するものや人物が描かれている部分を抜粋し整理する。

#### ① 21世紀の台湾学園映画に先鞭をつけた『藍色夏恋』と木村拓哉

1990年代後半から2000代前半にかけて、台湾映画は低迷していた。そうした中、2002年に易智言監督の『藍色夏恋』（原題：藍色大門）が公開された。興行収入は500万元に過ぎなかったものの、2002年の台湾映画の中では3位の記録だった<sup>4</sup>。『藍色夏恋』は、新

しい青春学園映画として注目を集めるとともに、その後の学園映画の基準となっていく。

『藍色夏恋』は、易智言監督によって、2002年に公開された台湾・フランス合作映画だ。高校生3人の男女の恋をめぐる淡く切ない物語である。あらすじは次の通り。17歳の孟克柔（桂綸鎂）は、親友の林月珍（梁淑慧）から恋の相談を受ける。その相手は水泳部の張士豪（陳柏霖）だ。彼をよく知らない孟克柔だったが、夜中に林月珍と一緒に彼が練習する学校のプールを訪れた際、林月珍の代わりに張士豪に声をかけた。だが思惑通りにはいかず、張士豪は林月珍ではなく孟克柔に好意を抱き始める。林月珍は張士豪に告白するが、振られてしまった。そんな月珍に克柔はキスする。張士豪は孟克柔に付き合ったいと告白するが、孟克柔は断り、「私は月珍を助けたかった…（中略）…だって彼女が好きだから、私が好きなのは女だ、と思う」と告げた。物語の終焉において、張士豪は、「もしある日、1年後かも3年後かもしれない、男を好きになることがあったら、最初に俺に言ってね」と伝える。互いに親密な気持ちを抱きながらも共に自転車を平行に走らせ、恋愛としては3人とも成就することなく物語は終わる。

『藍色夏恋』についての先行研究を整理しておく。趙庭輝は、映画論や文化批評を駆使し、青少年のセクシャリティーを通して、異性愛の周縁に位置する焦りと葛藤を露わにするとともに、従来の人たちの主流文化の価値観に挑戦する可能性を創り出した作品であると指摘している<sup>5</sup>。また、Fran Martinは、この映画がフランスとの合作であることに着目した上で、台湾のトムボーイを主役とする本作品の、境界が曖昧であるがゆえに強調される台湾性とセクシュアリティの特殊性について分析し、新しい台湾映画の可能性を見出している<sup>6</sup>。蔡文晟は、王家衛の映画の撮り方と比較しながら、時間の感覚が感じられない点や、物語よりも感覚やイメージを重視する技法について言及している<sup>7</sup>。本映画には物語の時間は明示されていない。だが、『藍色夏恋』の公開は2002年であるものの脚本は1997年に完成しているため、本稿では、『藍色夏恋』も90年代を描いた学園映画とみなして分析していく。

趙庭輝、Fran Martinの両者が指摘している通り、主役の孟克柔は女を愛する女だ。ほかの二人は異性愛者であり、異性愛と同性愛が掛け合わされた結果、ラブストーリーとしてはハッピーエンドではない。また、Fran Martinが指摘するように、孟克柔はトムボーイでもある。1990年代に文学界では同性愛文学が聯合報文学賞を受賞し、同性愛文学ブームが起こった。Fran Martinも、『藍色夏恋』は、1990年代に台湾で起こった同性愛運動により2000年代に生まれた同性愛文化ブームの産物の一つであり<sup>8</sup>、レズビアンが台湾の主流娯楽文化の一部になったと指摘している<sup>9</sup>。Fran Martinは、以下のように日本との関係についても分析している。

この映画は明らかに日本式の「汎アジア」映画の美意識を備え、雰囲気は日本のテレビドラマに似ている。視聴者はこの映画を「日本のドラマや公視の番組のようだ」

と思うだろう。明らかな例をあげてみよう。本作品の月珍が士豪に振られた後、彼は簡単に日本で当時人気のアイドル木村拓哉に取って代わられている…（中略）…『藍色夏恋』のように国を超えた地域文化の影響を受けた特徴を持つ台湾テレビドラマを、私たちは「台湾版日本ドラマ」と呼んでもいいだろう。<sup>10</sup>

このようにFran Martinは、『藍色夏恋』を「日本のトレンドドラマ」に似ていると指摘しており、具体的な例として、月珍の恋愛対象が士豪から木村拓哉に代わったことを挙げている。この場面について詳しくみていく。月珍は、「もし私が彼のボールペンで、彼の名前を、インクが無くなるまで書き続けたら、彼は私のことを好きになる」と信じている。だが、士豪に振られた後は、張士豪と書き始めたものの、途中から木村拓哉と書き続けたのだった。カメラは、4行目までは「張士豪」、5行目から「木村拓哉」と記されたノートとボールペンを焦点化して映し出す。

易智言監督は、アメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校で映画の修士の学位を取得した監督だ。にもかかわらず、日本のトレンドドラマのような雰囲気具备了とFran Martinに分析されている。「似ている」点やその背景については本稿では分析対象としていないが、「木村拓哉」というアイドルの名前が明確に描き出されていることに注目したい。

## ② 男の友情とその脆さを描いた『九月に降る風』と飯島愛

『藍色夏恋』から6年後の2008年に林書宇監督の『九月に降る風』（原題：九降風）が公開された。『九月に降る風』は、林書宇の自伝的作品だと言われている。新竹の高校に通う少年7人と少女2人の高校3年生の物語で、1996年9月に物語は始まる。7人の男の子たちはみな野球と野球選手廖敏雄の大ファンの不良少年で、それぞれ違った個性をもちながらも、野球ファンという共通項によりホモソーシャルに団結している。しかし、野球賭博事件によって野球への憧れが色褪せていくのと同時に、喧嘩や鄭希彦（リディアン・ヴォーン）のバイク事故を巡り、彼らの友情は時にぶつかり合いながら次第に脆く壊れていくのだった。

このように本作品は、男性同士の友情について7人の関係性の変化を丁寧に追っている。ある日、7人のたまり場となっている鄭希彦の部屋に、林敬超（林祺泰）一人が訪れる。彼は、自発的に散らかった雑誌を片付ける。それに対して、鄭希彦は、苛立った調子で「俺の家に来たらいつも片付けるのはやめてくれ」と告げる。林敬超は無言で俯き、部屋を後にする。男同士の友情については、特に友情を超えて愛情なのではないかという場面も描かれている。

『九月に降る風』のみを取り上げた先行研究はないが、鄭秉泓は、2008年という台湾映画起死回生のメルクマールの年に生まれた、新しい台湾映画の時代を切り開く3つの青春映画の1つとして、『九月に降る風』を取り上げている<sup>11</sup>。

『九月に降る風』では4つの場面で日本に関する描写がある。1つ目は、新竹都城隍廟の



前で、鄭希彦と湯啓進（張捷）2人の少年が、野球のテレビ中継を見ながら、バルセロナオリンピックで台湾が日本を打ち負かした時のことを思い出し、「日本人はきっと俺らのことを卑怯だと思ってたよ」「卑怯なのは日本人の方だよ、郭李建夫の球が打てないからって、彼を買っていったんだから」と会話する場面。2つ目は、1人の少年が乗ってきたHONDAのバイクMSRをみんなが憧れの眼差しで見つめる場面。3つ目は、少年の部屋の壁に貼られている「ドラゴンボール」のポスター。4つ目は、飯島愛の写真が掲載されているAV写真集を少年が持ってきて友人と楽しそうに見入りながら、「このお尻見て、桃みたい」「飯島愛がこんなに早く引退するなんてもったいない」と会話する場面である。

『九月に降る風』は男同士の友情および友情の脆弱さがテーマとなっており、女性はいくまで引き立て役に過ぎない。こうした点からみると、ニューシネマへの趙庭輝の見解とも一致する。時間設定に関しては、『藍色夏色』とは異なり、1996年と明示されている。

### ③ 九把刀『あの頃、君を追いかけた』と飯島愛

2011年に公開された九把刀監督の『あの頃、君を追いかけた』（原題：那些年，我們一起追過的女孩）は、2006年に刊行された九把刀の自伝的な同名小説をもとにして、1994年から2005年を描いた回顧型青春学園映画だ。主な舞台は高校時代を送った彰化だが、大学時代を過ごした新竹も後半部分に少し登場する。金馬獎で柯景騰（九把刀の本名）を演じた柯震東が最佳新演員を受賞した他、台湾において興行収入4.1億元を記録し、中国でも大ヒットしたという。2018年には日本版が長谷川康夫監督作品として公開されている。

あらすじは次の通り。主役の柯景騰（柯震東）と同じく精誠高中に通う曹国勝・謝明和・廖英宏・許博淳の5人の少年たちは、頭はエロでいっぱい馬鹿騒ぎをして青春を謳歌していた。担任の先生はクラスで一番優秀で真面目な女生徒・沈佳宜（陳妍希）に、問題児の柯景騰たちの監視役を命ずる。彼らはいづつか沈佳宜に恋心を寄せるようになった。柯景騰とは特に親密となっていくが、彼の幼稚さゆえに、二人の恋は終わってしまう。

本映画は、コメディだ。明確に描かれた日本の大衆文化が現れる場面は3つある。第1に、『SLAM DUNK』という書名は出てこないが、『SLAM DUNK』の著者である井上雄彦（1967-）が、なぜか作中で「数週間前に交通事故死した」と1996年に勝手に殺されている。なお、1996年は『SLAM DUNK』が少年雑誌『週刊少年ジャンプ』での連載が終了した年だ。第2に、後半の大学生になってからの物語で、見るからにオタクな1人のルームメイトが、『ドラゴンボール』を読んでいる。第3に、大学で出会った個性的な寮のルームメイトについて、「ルームメイトたちはいろんなところから集まったが」、「幸い、共通の話題があった」という柯景騰の語りの後に、ルームメイトたちの「飯島愛は年取ったよ、小沢まどかはわりといい感じ、大浦あんなもいい」といった会話の場面が続く。

なお映画には『ドラゴンボール』以外の日本の漫画は登場しない。だが原作では、柯景騰の将来の夢は漫画家であり<sup>12</sup>、漫画に纏わる情報が具体的な固有名詞を含め多数登場す

る。例えば『少年快報』（日本の『少年マガジン』『少年サンデー』『少年ジャンプ』『少年チャンピオン』の人気コンテンツを集めて掲載した人気雑誌）<sup>13</sup>、『ちびまるこちゃん』<sup>14</sup>、『SLAM DUNK』<sup>15</sup>、『H2』<sup>16</sup>。さらにトレンドドラマ『東京ラブストーリー』および主題歌『ラブ・ストーリーは突然に』も具体的にタイトルが言及されている<sup>17</sup>。また、原作には、「俺たちはたくさんのハリウッド映画を見て、さんざん日本のドラマを見て、多くの恋愛小説や少女漫画などを読ん」<sup>18</sup>だ、「熱血タイプで格闘漫画好きな俺は『グラップラー刃牙』『はじめの一步』『軍鶏』『コータローまかりとおる!』『鉄拳チンミ』『柔道部物語』が愛読書だ」<sup>19</sup>とあり、九把刀の読書史の一端を垣間見ることができる。

また、原作にはAV女優は出てこない。これについて、呉思萱は「この脚本は原作小説の多くの内容を省略している一方、原作にはない要素を加えている。例えば、許博淳の「勃起」や柯景騰が家で「裸」で生活している映像や「オナニー射精」競争の場面など」<sup>20</sup>と言及している。映画では柯景騰の親友の一人である許博淳がよく勃起しているからという理由で勃起と呼ばれるようになったとの紹介が冒頭であるが、原作では、許博淳にニックネームはなく名前のままである。また、呉思萱も指摘している通り、原作では、柯景騰は沈佳宜より3センチ背が低いと記されているのに対し、映画版では、183センチの柯震東が柯景騰を演じ、160センチの陳妍希が沈佳宜を演じている。映画は、原作に比べ、主人公たちの男性性やマッチョさやエロが強調されている。

#### ④ 陳玉珊『私の少女時代』と内田有紀と『non-no』

『私の少女時代』（原題：我的少女時代）は、数々のドラマヒットメーカーである陳玉珊監督の初の映画作品として、2015年に公開された。興行収入も『あの頃、君を追いかけた』と同じく4.1億元に上った。『私の少女時代』は90年代のある台湾の高校を背景に、ごく平凡な女子高生のヒロイン林真心（ビビアン・ソン）が学校一イケメン男子・欧陽非凡（李玉璽）に片思いしながらも学校一のヤンキー徐太宇（王大陸）に惹かれていくラブコメディだ。ある時、林真心がプールサイドを掃除していると欧陽非凡と学校一美人で人気の陶敏敏（簡廷芮）がやってきた。林真心は二人が付き合っていると勘違いし、見てはいけないとプールに潜る。真心は、学校のヤンキー徐太宇と手を組み、欧陽非凡と陶敏敏を別れさせようと試み、様々な爆笑ハプニングを引き起こす。

日本の大衆文化が現れる場面は5つある。1つ目は、荷物検査の際に男子のカバンから、AV女優朝倉舞のグラビア写真や任天堂のゲームボーイが発見される場面だ。2つ目は、黒板のドラゴンボールの落書き。以上は、一瞬映し出されるに過ぎないが、3つ目は、最も長い場面なので、会話などを追っていく。林真心が徐太宇に好みの女性について尋ねた際、徐太宇は「内田有紀もいい、酒井法子も」と答える。それに対して、林真心は「日本の女の子ばかり」と残念そうにするものの、徐太宇は彼女の顔を見ながら微笑み、日本語で「はい」と返事した。それを受けて、林真心は、日本の女性ファッション誌『non-no』を購入し、

家に帰ると、家の前には『non-no』のカバーガールにそっくりな女性（林真心の兄の彼女）が立っていた。彼女に手伝ってもらって、眼鏡を外して前髪を作るなど大変身する。変身した林真心の姿に欧陽非凡は微笑んで「かわいい」と伝える。4つ目は、怖い軍訓教官が新しく着任した際、軍訓室に飾られた日本刀である。軍訓教官とは、戒厳令下、高校や大学に反政治的な思想や活動の監視役および教育係として配属された現役軍人で、民主化以降は生活指導教員のような役割を果たしていたが、民進党政権下、2023年に廃止されることがすでに決まっている。まるで失われていく軍訓教官の保守的な権威を日本刀で補うかのようだ。5つ目は、大人になった林真心が高校時代の日記を読み返した際に見つけた「喜歡の人—徐太字」（原文ママ）「討厭の人—兄」（原文ママ）というひらがなの「の」を使った表記である。なお、「喜歡」は好きという意味、「討厭」は嫌いという意味である。

『私の小女時代』における日本大衆文化は、漫画、AV、アイドル、ファッション誌、日本語、そして日本刀まで多岐にわたる。アイドルやファッション誌は憧れの参照対象として描かれ、それにより主人公が好きな人好みに変身し、好意を得るという物語の展開にまで影響を与えている。

本章では、台湾における学園映画の系譜について先行研究を参照しながら追うとともに、21世紀以降の青春学園映画『藍色夏恋』、『九月に降る風』、『あの頃、君を追いかけた』、『私の少女時代』4本の、物語の内容、時代背景、先行研究、日本表象について確認した。これら4本はいずれも現在進行形、回顧形式を問わず、90年代を舞台としている。そこで、次章では、1990年代がどんな時代であったのかを確認した上で、90年代における日本大衆文化について整理する。

### 3. 1990年代の台湾における日本大衆文化

#### (1) 1990年代が学園映画の舞台に選ばれる意味

21世紀の台湾学園映画は、なぜ70年代、80年代、或いは2000年代ではなく、90年代を選んだのか。まず、第2章で取り上げた4人の監督の内、易智言監督は1959年生まれであるものの、1976年生まれの林書宇監督、1978年生まれの九把刀監督、1974年生まれの陳玉珊監督にとって、1990年代は自身の高校時代でもある。台湾の年齢構成において、90年代に青春時代を過ごした人々が多いことも興行を考えた上での妥当な判断だといえるだろう<sup>21</sup>。

何より、多くの人にとって、1987年の戒厳令解除を経て、台湾が民主化し、個人の尊厳を求めて多元化していった90年代という時代は、希望に満ちた光り輝く回顧したい時代なのかもしれない。

1980年代を舞台とする学園映画も存在しないわけではない。例えば、楊雅喆監督が、男女3人の友情に異性愛と同性愛を掛け合わせ、解けない三角関係の切なさを描いた『GF\*BF』（2012）や、17歳の高校生が80年代に高校生だった母の青春を追求める周格



泰監督『若葉のころ』（2015）など1980年代を描いた学園映画をみると、まだ戒厳令下にあり、様々な規律も厳格であったせい<sup>22</sup>、高校生活の楽しさよりも、軍訓教官への反発や自由への渴望を巡る悔しさや葛藤の方が多く描かれている。

これらの80年代を舞台に選んだ映画は、作品の半分以上の場面が80年代以外で構成されているという特徴がある。『GF\*BF』は、80年代の高校生活と90年代の大学生活、および社会人になってからの2000年代、および2012年の4つの時代が描かれているが、80年代よりも、90年代以降に多くの時間が割かれている。また、『若葉のころ』は、主人公の母親が高校時代を過ごした80年代と主人公自身の現在の高校生活の両方が描かれているが、物語の中心は現在（2010年代）にある。80年代の学園物語を物語の中心に据え切らないのは、全編において80年代のみを描いてはエンターテインメント作品として成立しないということなのだろう。

## （2）哈日現象とその変遷

1993年の地上波放送とケーブルテレビの全面自由化により、台湾メディアは急速に多角化し、日本専門チャンネルも現れ、日本の大衆文化への関心も高まっていく。1990年代、台湾は、日本大衆文化を中心として、10年間にわたる哈日現象（日本マニア・ブーム）の最中にあった<sup>23</sup>。「哈日」という言葉は、哈日杏子の4コマ漫画集『早安日本』（尖端出版、1996）の中での造語「哈日症（＝日本が大好き病）」を由来とする。

日本大衆文化の台湾流入については多くの先行研究がある。中でも恐らく最も充実した研究である李衣雲『台湾における「日本」イメージの変化、1945－2003——「哈日現象」の展開について』は、哈日現象が起こった背景を、次のようにまとめている。

日本大衆文化は長期にわたりアンダーグラウンドで確実に流通してきたとはいえ、輸入された数量や種類は限られていた。しかし、1990年代には、日本大衆文化は正規のルートを得ることにより、台湾に押し寄せてきた。まもなく、台湾市場では大量で「新鮮な」日本大衆文化商品があふれ、大きな経済活動を生じさせた。この経済力は次第に大衆文化以外の領域に拡大して、マスメディアや金融業を含めた業界も無視できない規模となり、さらに日本大衆文化や「日本」に一種の象徴力＝ブランドのイメージを与えた。日本漫画はその際立った例の一つである。<sup>24</sup>

しかし、日本大衆文化ブームはずっと続いたわけではない。その後の様子について李衣雲は以下のように整理している。

哈日ブームは台湾で約10年間続いたが、2001年以降には次第に斜陽化していった。日本大衆文化は、その幾多の領域をそれぞれ異なる代替対象によって奪われていった。

例えば、まず、1996年以降、消費対象の多様化で、日本漫画市場はゲーム、台湾のカンフー小説、恋愛小説などに侵蝕された。日本ドラマの状況はさらに際立っている。1990年代後半、日本の漫画出版産業が台湾の漫画市場を掌握して拡大させるとともに、その市場を長期にわたり発展させ続けた状況と異なり、日本のテレビ局や事務所は海外の放送権料を大幅に高騰させながら、台湾の日本ドラマの放送市場に対して無制限な競売の方法をとった。台湾のCATV局やチャンネルは大ヒットしたドラマの放送権料を負担できず、日本ドラマ放送の即時性や「鮮度」を保てなくなった。結局、放送権料がより低い韓国ドラマ、台湾の新興「偶像劇」などに転向していった。<sup>25</sup>

今回取り上げた4作品は、いずれも日本大衆文化ブーム後に公開されている。つまり、監督も視聴者も、90年代の日本ブームに続き日本ブーム斜陽後の台湾や韓国ドラマブームも経験している。

### (3) ジェンダー化される日本漫画

先述したように、Fran Martinは、『藍色夏恋』を「日本のトレンドドラマのようだ」と指摘した。確かに、台湾では現在、台湾はもちろん、アメリカ、中国、韓国などの映画やドラマも日常的にテレビ放映されており、単純に日本の影響を分析することは難しい。だが、Fran Martinの指摘のように、台湾の映画が、日本ドラマの影響を受けていると言うならば、漫画を原作にした日本ドラマが多い以上、台湾のドラマや映画が、間接的にあるいは直接的に日本の漫画の影響を受けていることも予想される。

例えば、1993年に「衛視中文台」で放映された『東京ラブストーリー』は、台湾における日本ドラマブームの基礎を築いた作品の一つであり、2002年まで繰り返し台湾のケーブルテレビで再放送された<sup>26</sup>。その『東京ラブストーリー』の原作の掲載誌は男性向けのコミック誌『ビッグコミックスピリッツ』だ。

頼昱誠は、神尾葉子「花より男子」(月2回刊少女漫画誌『マーガレット』1992-2004年連載)を原作とし、2001年に台湾で大ヒットしたドラマ『流星花園』について、「『流星花園』というテレビドラマは、日本文化的創造・想像力に深く影響を受けながら、台湾の社会・文化的状況のなかで、送り手と受け手に文化の混淆と引用をされ、中国、香港と違って、日本少女マンガをドラマ化する「電視偶像劇」という台湾「独自」の文化形態をつくり出してきた<sup>27</sup>と指摘している。ただ先述したように、九把刀は少女漫画に限らず少年漫画も読んでいる。

少女漫画、少年漫画に関わらず、李衣雲が、「日本大衆文化や「日本」に一種の象徴力＝ブランドのイメージを与えた。日本漫画はその際立った例の一つである」と指摘したように、1990年代以降の台湾の映像を考える上で、日本漫画の影響を看過するわけにはいかない。

そこで、日本の漫画について簡単に確認しておきたい。日本における漫画というメディアは、男性向けの少年漫画と女性向けの少女漫画とに二分されている。このような区分が起る要因は、作品がまず漫画雑誌に掲載され、その後単行本化されるという場合が多く、その漫画雑誌が、男性読者を想定した少年雑誌と女性読者を想定した少女雑誌に分けられているからだ。よって、「女性または男性の一方にとって、共感が持て、都合が良く、心地よい、一種のファンタジーとでも呼べるものになっている」<sup>28</sup>傾向がある。

日本雑誌協会の「雑誌ジャンルおよびカテゴリ区分」をみると、すべての雑誌を、まず一番大きなカテゴリ区分として、①男、②女、③男女とにジェンダーによって三分している。ところが、「コミック」（漫画雑誌）の区分に類された雑誌は、①男、②女にカテゴリには属しているものの、③男女のカテゴリにはない。例えば、①男のカテゴリに、「少年向けコミック誌」：5冊（『週刊少年サンデー』など）、「男性向けコミック誌」：70冊（『週刊ヤングジャンプ』など）が属している。②女のカテゴリに、「少女向けコミック誌」：19冊（『りぼん』など）、「女性向けコミック誌」：50冊（『Kiss』など）がジャンル分けされる。にもかかわらず、③男女のカテゴリにはコミック誌はない<sup>29</sup>。つまり日本雑誌協会の区分に従うと、ジェンダーレスな漫画雑誌は存在しないということになる<sup>30</sup>。

#### （4）日本のアダルトビデオと伝説となっていく飯島愛

前掲の李衣雲の研究では、日本漫画とアニメ、日本ドラマ、アイドルに関しては詳細な分析がなされているが、同著において言及されていない1990年代に台湾で流行した日本大衆文化に、日本のアダルトビデオがある。

台湾にアダルトビデオが流入したのは、1970年代のことだ。当時はヨーロッパと香港のものが多数派であり、「小電影」や「黄色電影」などと呼ばれ映画館などで上映されていたという。その後、1980年代に入り、アメリカや日本からビデオの形式で輸入され、現在の呼称に通じる「A片」と呼ばれ始める。レンタルに加えて夜市などでも販売されたことで、家庭やMTVなどでも視聴可能となった。1990年代は、日本アダルトビデオの全盛期で、レンタルビデオやVCD以外にも専門テレビチャンネルなどメディアも多岐にわたり、「日本AV女優」「飯島愛」といった言葉が流行語になったほどだ<sup>31</sup>。2000年代には、日本や欧米のアダルトDVDが販売されたほか、個人でインターネットを利用して動画を視聴したりダウンロードしたりすることも可能となり、台湾人自身の自撮りや盗撮動画も動画サイトに掲載され始める<sup>32</sup>。

このように1990年代は、「日本AV女優」「飯島愛」が流行語にはなったほど日本のアダルトビデオの全盛だった。2000年代以降、「日本AV女優」「飯島愛」は、映画にまで描かれる対象となっていく。拙論で取り上げた4作品の内、『九月に降る風』（2008）では「飯島愛」、『あの頃、君を追いかけた』（2011）では「飯島愛」「小沢まどか」「大浦あんな」、『私の少女時代』（2015）では「朝倉舞」の名が具体的に挙げられていた。また、拙稿は90年

代を舞台とする学園映画のみを分析対象としているため取り上げていないが、台湾映画に描かれる日本のアダルトビデオやAV女優を考えるうえで、2005年にベルリン国際映画祭で銀熊賞（芸術貢献賞）を受賞した蔡明亮監督の『西瓜』（原題：天邊一朵雲、2005年）の存在も忘れるわけにはいかない。『西瓜』は、AV男優の純愛を描いた物語で、日本のAV女優・夜桜すももがAV女優役で出演している。またAV女優の波多野結衣は、潘志遠監督作品『サシミ』（原題：沙西米、2015年）で、AV女優の役を演じた。両作品ともに男性役は台湾人俳優が演じているのに対し、主なAV女優役は日本の現役AV女優が演じている。

日本のAV女優や飯島愛が台湾の90年代においてどのように受容されていたのかを明確に分析することは難しい。だが2000年代以降、集団的な記憶として映画に描かれる対象とされるほどに如何に伝説化されていったのか、2000年代以降の飯島愛を例として確認する。

飯島愛著『プラトニック・セックス』（小学館、2000年10月）の台湾版『柏拉圖式性愛』（洪慶鐘、張佩偉訳、尖端出版、2000年12月）出版翌年の2001年2月の台北国際ブックフェアで、飯島愛が台湾でサイン会を開いた際には、雨の中、サインを求めて徹夜組も出たほどで、一時間ごとに飯島愛の一挙手一投足がニュース番組で報道され、同時期に台湾に来ていた2000年ノーベル文学賞受賞者の高行健への注目が薄れてしまったという<sup>33</sup>。

飯島愛が亡くなったのは2008年12月18日のことだった。台湾の大衆紙『聯合報』が報道する飯島愛に関する記事を検索したところ、2008年の死亡後のわずか12日間に28本の記事が掲載されていた。さらに、2009年には18本、2010年には3本、2013年から2016年には毎年1本ずつ、飯島愛に関する報道記事が掲載されている。

例えば、死後8日後2008年12月25日の記事には、「飯島愛は1950、60年代生まれの男たちに深い影響を与えた。昨日は多くの男たちがネットで熱く語り合い、ある者は「飯島愛はすべての台湾男性のノスタルジーである」と形容した<sup>34</sup>とある。また同日、「Tバックの愛ちゃんはアジア男性の集団的記憶」と題した記事も掲載されている<sup>35</sup>。

翌日12月26日の『聯合報』では日本の新聞の文芸欄に相当する「聯合副刊」において、作家・林文義が「飯島愛」と題した詩を発表している。詩には、「性幻想の夢の中の恋人と別れる時　バブル経済は中年男性を更なる憂鬱にする（後略）」<sup>36</sup>とある。作家の陳柏青は翌年1月の「聯合副刊」に「祈願樹」というエッセイを発表し、「あの女性は、かつて自分たちの世代の男子たちがイメージする異性の肉体の究極的なモデルだった。あの頃この女性がどの作品に出ていたのか誰もはっきりとは覚えていない、しかし…（中略）…「飯島愛」この三文字はすべての日本のAV市場を表している」<sup>37</sup>と綴った。さらに詩人の孟樊は、2009年10月に「聯合副刊」掲載の詩「歌のようなアンダンテ・パロディ・瘵弦」において、「まじめくさって家で飯島愛を見る偶然　村上春樹があの時ジャズに出逢わなかった偶然」<sup>38</sup>と詠った。



このように、『聯合報』における飯島愛の記事を確認するだけでも、飯島愛が台湾の男性たちに集団的記憶として懐古され、文学素材にも選ばれるなど飯島愛が伝説化されていった軌跡の一端が見受けられる。

#### 4. 日本大衆文化表象とジェンダー

##### (1) 4作品における日本大衆文化表象と異性愛・同性愛関係

日本漫画や大衆文化の影響を考える際に、例えば、『私の少女時代』の主人公の林真心の風貌やだらしない生活が『のだめカンタービレ』（掲載誌『Kiss』二之宮知子原作）の野田恵に似ているといったイメージに基づいた相関関係を分析することは、本稿の目的ではない。本稿では、あくまで、台詞や場面に明確に表された日本の大衆文化のみを分析対象としている。

そこで、第2章で確認した4つの作品において、明らかに日本大衆文化と関連する表象を作品公開の時系列順に下の表に整理する。

映画タイトル	上映年	日本表象
『藍色夏恋』	2002	木村拓哉
『九月に降る風』	2008	プロ野球、『ドラゴンボール』、NSR、飯島愛、
『あの頃、君を追いかけた』	2011	井上雄彦・オタク・『ドラゴンボール』・飯島愛・小沢まどか・大浦あんな
『私の少女時代』	2015	朝倉舞・任天堂のゲームボーイ・ドラゴンボール・内田有紀・酒井法子・「はい」・『non-no』・日本刀、 「の」

これら4本の映画の主要なテーマは日本ではない。しかしながら、4本すべてに日本の大衆文化は登場し、90年代を描いているにも関わらず、時代を経るに従って徐々に増えている。韓国ドラマや台湾ドラマが中心となる中、日本自体がノスタルジーなものに次第になっているのかもしれない。

今度は、これらの映画における異性愛・同性愛関係について考えたい。まず、4つの映画における男女関係と恋愛関係を考慮した結末は、以下の通りだ。

『藍色夏恋』（2002）は、女2人男1人の三角関係で、1人が同性愛者、2人が異性愛者だ。同性愛者の孟克柔は月珍を愛し、月珍は土豪を愛し、土豪は克柔を好きのために、3人の関係は恋愛的には成就せずに終わる。

『九月に降る風』（2008）は、女2人男7人、主に男間の友情関係が中心的なテーマだが、女性をめぐるほのかな恋心と、1名の男性が同性愛的な感情を主人公に抱いている様子が一部描かれている。恋愛関係としてはいずれも成就することはなく、男性同士の友情とそ



の友情が時にぶつかりながらもろく壊れていく様子が中心的に描かれている。

『あの頃、君を追いかけた』(2011)は、女2人男5人がメインキャストで、男5人が女1人を追う構図だ。メインキャストはみんな異性愛者だが、結局だれも彼女とはハッピーエンドにならなかった。同性愛者は大学宿舎のシャワールームのシーンで主な登場人物やストーリーとは関係なく添え物のように描かれている。

『私の少女時代』(2015)は、女2人男2人が主な登場人物だが4人とも異性愛者である。4人は異性愛者として好きになったりなれたりしながら、最終的には、林真心は徐太宇とハッピーエンドとなる。

このように同性愛が主題となっているのは『藍色夏恋』のみで、『九月に降る風』では主題ではないがほんの一部に描かれている。また、映画秘宝編集部『漫画+映画-漫画原作映画の現在地』は、「21世紀の日本映画における漫画原作の企画の功績はいったい何か？それはひとことでいうと「ポップ化」だ」<sup>39</sup>と指摘しているが、この4本を見る限り、いずれも漫画が原作ではないにしても、「ポップ化」が徐々に進み、キャラクター化された配役によるわかりやすい物語となっているとともに、異性愛が強化されている傾向も見受けられた。

## (2) 日本人タレントと異性愛強化

4作品すべてに共通しているのは、日本人タレントが登場すると異性愛を前提とした男性性、女性性が強化されているということだ。確認してみよう。

『藍色夏恋』では、「もし私が彼のボールペンで、彼の名前を、インクが無くなるまで書き続けたら、彼は私のことを愛してくれる」と信じている月珍が、士豪に振られた後は、張士豪ではなく、途中から木村拓哉と書いた。異性愛者の月珍は、士豪という失恋の現実から、木村拓哉という新しい異性愛ファンタジーの対象へと逃避した。

『九月に降る風』では、郭李建夫が日本の球界に買われていった話をした時の、台湾や大人の社会への無力感とは反対に、飯島愛などのAV写真集が登場した場面では、少年たちはようやく大人の社会へ一歩入っていくことを喜んでいるかのように、性的欲望の対象として飯島愛らの写真集に熱心に見入っていた。

『あの頃、君を追いかけた』では、大学時代に個性が全く異なるルームメイトたちにとって唯一の共通の話題として、飯島愛などAV女優が取り上げられた。会うこともかなわず、追いかけても手に入らない現実の女の子に代わって、AV女優が、異性愛ファンタジーの対象として登場し、男性性はより強調されていった。

『私の少女時代』では、女主人公が徐々に惹かれていったヤンキー少年に好みの女性について尋ねた際、彼が日本のアイドルの名を告げたことを受けて、主人公は、日本の女性ファッション誌『non-no』を購入し、その後、好きな人好みの女性に変身した。つまり、日本の大衆文化や日本人タレントとの出会いによって、主人公・林真心は男性の欲望の対

象を自ら演じたのである。

本章では、各映画において、日本大衆文化がどのように現れ、どのような機能を果たしているのかについて分析した。『ドラゴンボール』、『SLUM DUNK』、『non-no』木村拓哉、飯島愛およびその他のAV女優、内田有紀、酒井法子といった日本大衆文化および日本のタレントは、映画が公開された当時においても忘れられていなかった90年代の共通の記憶なのだろう。その中で、木村拓哉、飯島愛、内田有紀といった日本のタレントが、登場人物たちの異性愛的な欲望の対象として登場し、登場人物たちに現実から新たな一歩を踏み出させるきっかけとして機能していることが明らかになった。つまり、日本大衆文化や日本のタレントは、台湾の学園映画において、現実あるいは妄想のいずれにおいても、登場人物たちに、異性愛的な男性性および女性性を欲望させ、その欲望を満たす機能を果たしているのではないだろうか。

### (3) ジェンダー多元化台湾

先述したように『藍色夏恋』では同性愛が描かれ、『九月に降る風』ではほんの少し同性愛を感じされる場面があったものの、2010年以降に公開された『あの頃、君を追いかけた』では添え物のように一瞬のみ表され、『私の少女時代』では同性愛はほぼ描かれていない。またすべての作品において、異性愛的な欲望の対象として日本のタレントが機能している傾向が見受けられた。

台湾では、2017年5月24日に大法官會議（憲法裁判所に相当）が、現行民法が同性婚を認めていないことは違憲だとする判断を下し、行政府と立法府に対し2年以内に同性結婚を認める法改正を行うことを命じた。ここで、現代台湾におけるLGBT史を文化的な関わりから簡単に振り返っておこう。

台湾文学・映画は、台湾社会において前衛としてLGBT文化を牽引してきた。1983年に白先勇が、同性愛者の息子の父親との葛藤と1970年代の台北の男性同性愛コミュニティを描いた小説『孽子』を出版、同作品は1986年に映画化、2003年にテレビドラマ化される。1993年には李安監督がアメリカで白人の恋人と同居している同性愛者の台湾人青年が両親を安心させるため、中国人女性との偽装結婚を画策する『ウェディングバンケット』を公開、同作はベルリン国際映画祭において金熊賞を受賞した。女友達への愛情に苦しむ女子大生の葛藤を描いた邱妙津の小説『ある鰐の手記』（1994）は高い評価を受け、LGBTを描いた作品が聯合報文学賞などの文学賞を相次いで受賞した影響もあり90年代には多くのLGBT文学が誕生する。96年には同性愛専門雑誌『G&L 熱愛雑誌』が創刊された。また、作家の許佑生とウルグアイ男性との同性同士の結婚式の様子がテレビ中継され注目を集めた。98年には台湾最初の同志社団法人「台湾ホットライン協会」が創設される。翌年には同性愛専門書店「晶晶書庫」が開業。2003年には第一回目の「台湾LGBTプライドパレード」が台北で挙行された。1998年より準備が続けられていた「性別平等教育法」

は2004年に公布される。2014年には「台湾国際クイア映画祭」が初めて開催され、2015年には高雄で「同性パートナー」登録制度が始まる<sup>40</sup>。

こうした経緯を経て、上述したように2019年の同性婚の合法化が予定されるに至った。だが同性婚合法化が決定すると、キリスト教関係団体などを中心に反対運動が行われ始める。2018年11月24日の統一地方選挙と同時に行われた公民投票で扱われた10の議題の内、半数の5つが民法下の同性婚の規定や小中学校でのLGBT教育に関する議題であった。公民投票において、同性婚合法化に反対する団体は、①民法が規定する婚姻要件を一男一女に限定すること、②義務教育でLGBT教育を実施しないこと、③民法の婚姻に関する規定以外の方法で同性カップルが永続的共同生活を営む権利を保障することの3つの議題を提出しすべてが過半数の賛成票を得た。それに対して婚姻平等化に賛成する団体も①民法の婚姻章が同性カップルによる婚姻関係を保障すること、②義務教育の各段階でジェンダーの平等（LGBTを含む）に関する教育を実施することの2つの議題を提出したがいずれも否決された<sup>41</sup>。反対票には、現政権への批判票も含まれていると思うが、いずれにしても、投票結果は、アジア最初の同性婚容認に台湾全体が一枚岩で向かっているわけではない事実を浮き彫りにした。

## 5. おわりに—ジェンダー多元化台湾の映画において回顧されるジェンダー保守日本

本稿では、90年代を舞台とする台湾の学園映画4本において、日本大衆文化がどのように表象されているかを整理するとともに、その手法を分析しその意義を考察した。

その結果、21世紀に1990年代を描いたこれら4作品は、時が経つほどに、日本の大衆文化が多く現れ、単純化され、異性愛的な恋愛ストーリーが多くなっていた。日本の大衆文化は、作品において、男性性、女性性を強調し、異性愛的な欲望を満たす役割を果たしていることが明らかになった。つまり、日本大衆文化は、規範的なジェンダー化や異性愛の強化として機能している。

台湾は、1990年代以降、民主化、多元化していく中で、規範的異性愛以外のあらゆるセクシュアリティを容認しようという方向に進んでいるようにみえた。映画はLGBT文化を牽引してきた急先峰の一つであったはずだった。だが、2019年の同性婚合法化の決定は、台湾の多数派がLGBTに寛容な社会を望んでいるわけではないことを逆に顕在化させた。2002年から2015年の間に公開された4本の台湾学園映画において、台湾社会が向かっているようにみえたLGBTに寛容な方向とは相反する異性愛強化として機能する役割を担ったのが台湾人俳優ではなく日本人タレントであったのは、かつてLGBT文化をリードして来た台湾映画としての必然の選択なのだろう。

現代台湾における学園映画は、台湾の90年代および当時の流行の一部としての日本の

大衆文化はもちろん現代日本さえも、異性愛に基づいた保守的なジェンダー規範とともにノスタルジックに懐古しているのではないだろうか。

※本稿は、大妻女子大学平成29年度国外研修、JSPS科学研究費助成事業15K16725、17K02658、外交部臺灣奨助金の研究成果の一部である。第3回竹塹學國際學術研討會、第80回日本台湾学会台北定例研究会、東京台湾文学研究会での報告に際し貴重なご意見をくださったみなさまに深く感謝申し上げます。

- 
- 1 中華民国剪輯協會「影視行情與資料 票房」  
<http://neweforu.weebly.com/24433352223489224773332873603926009.html> (2018年11月17日アクセス)。
  - 2 日本統治時代を舞台とする作品については、赤松美和子「台湾ポストニューシネマの日本表象—『悲情城市』(1989年)から『海角七号』(2008年)へ」『日本台湾学会報』第15号、2013年、40-54頁、赤松美和子「現代台湾映画における「日本時代」の語り—『セデック・バレ』・『大稻埕』・『KANO』を中心に」所澤潤、林初梅編著『台湾のなかの記憶—戦後の「再会」による新たなイメージの構築』三元社、2016年、157-190頁に詳しい。
  - 3 趙庭輝「《藍色大門》：青少年的性別形象與情慾流動」『廣播與電視』第22号、2004年、26頁。
  - 4 中華民国剪輯協會「影視行情與資料 票房」(前掲)。
  - 5 趙庭輝「《藍色大門》：青少年的性別形象與情慾流動」(前掲論文)。
  - 6 Fran Martin (馬嘉蘭)、呉文薰訳「臺灣(跨)國電影、或、一個臺灣T的勇闖天涯：論《藍色大門》」『電影欣賞』第122期、2005年、85-90頁。
  - 7 蔡文晟「時間之外《藍色大門》與王家衛美學論」『電影欣賞』第137期、2008年、77-81頁。
  - 8 Fran Martin (前掲論文) 87頁。
  - 9 同上。
  - 10 同上。
  - 11 鄭秉泓「青春的軌跡：時代的印記—《九降風》、《海角七號》、《囧男孩》中的成長課題」『電影欣賞』第27卷第1期、2008年、99-103頁。
  - 12 九把刀、阿井幸作・泉京鹿訳『あの頃、君を追いかけた』講談社、2018年、15頁。
  - 13 同上、23頁。
  - 14 同上、20頁。
  - 15 同上、50頁。
  - 16 同上、130頁。
  - 17 同上、151頁。
  - 18 同上、222頁。

- 19 同上、226頁。
- 20 吳思萱「回頭看《那些年》：論男子漢的戀愛與陽剛氣質」『性別平等教育季刊』第71期、2015年、103頁。
- 21 国家發展委員會「中華民國人口推估（105至150年）」  
<https://www.ndc.gov.tw/cp.aspx?n=AAE231302C7BBFC9>（2018年11月17日アクセス）。
- 22 楊國鑫「台灣的完全解除髮禁案例」『應用倫理研究通訊』第35期、2005年、40頁。
- 23 李衣雲『台灣における「日本」イメージの変化、1945-2003——「哈日現象」の展開について』三元社、2017年、2頁。
- 24 同上、413頁。
- 25 同上、418頁。
- 26 同上、328頁。
- 27 賴昱誠「台灣における日本ポピュラー文化の受容と変容」『明道通識論叢』第7期、2009年、131頁。
- 28 谷口秀子「少女漫画における男装：ジェンダーの視点から」『言語文化論究』第15号、2002年、105頁。
- 29 一般社団法人日本雑誌協会「雑誌ジャンルおよびカテゴリ区分一覧」  
<http://www.zakko.or.jp/subwin/pdf/genre.pdf#m06>（2018年11月23日アクセス）。
- 30 もちろん同性愛をテーマとする作品は、数多くコミック雑誌に掲載されている。例えば、ゲイの男性を主人公とする羅川真里茂「ニューヨーク・ニューヨーク」（少女漫画誌『花とゆめ』1995-1998連載）、百合を描いた森永みるく『ハナとヒナは放課後』（少年漫画誌『月刊アクション』2015-2017連載）、ゲイの弟の夫を描いた田亀源五「弟の夫」（少年漫画『月刊アクション』2014-2017連載）など。
- 31 簡妙如「再現的再現一九〇年代台灣A片「常識」的分析與反思」『新聞學研究』第58期、121-122頁。
- 32 周姘玲「從智財權角度論日本AV產業在台灣之法治發展」（逢甲大學 財經法律研究所 2014年度修士論文）26頁。
- 33 周誠寬「飯島愛旋風的反思」『資訊與電腦』第248号、2001年3月、2頁。
- 34 何定照「柏拉圖式性愛 寫力爭上游人生」『聯合報』2008年12月25日。
- 35 『聯合報』2008年12月25日。
- 36 『聯合報』2008年12月26日。
- 37 「許願樹」『聯合報』2009年1月31日。
- 38 「如歌的行板——虛擬痙弦」『聯合報』2009年10月15日。
- 39 映画秘宝編集部『漫画+映画！漫画原作映画の現在地』洋泉社、2017年、8頁。
- 40 劉靈均「第30章 性的マイノリティ運動」赤松美和子・若松大祐『台灣を知るための60章』明石書店、2016年、172-176頁。



- 41 「圖表整理包／10大公投結果一覽 7案通過、3案不通過」『聯合新聞網』2018年11月14日、  
<https://udn.com/vote2018/story/12539/3491366> (2018年11月25日アクセス)。

## **Nostalgia for the 1990s in Taiwanese School Films and Japanese mass culture**

**Miwako Akamatsu**

This paper focuses on four Taiwanese school films set in the 1990s, examines the ways in which Japanese mass culture is represented in them, analyses the methods of representation used, and considers their significance.

In these four films, which were shot in the 21st century but set in the 1990s, it was established that as time went by, Japanese mass culture was featured more frequently and became more simplified. Heterosexual love stories also became more common. In all four films, it was established that Japanese mass culture emphasizes masculinity and femininity, and fulfils the role of satisfying heterosexual desires. In other words, Japanese mass culture functions to reinforce gender norms and heterosexuality.

School films in contemporary Taiwan nostalgically look back on the 1990s in Taiwan and Japanese mass culture as part of the associated trends of the time, as well as contemporary Japan, in addition to conservative gender norms based on heterosexuality.